

昨年ザイール河源頭流域踏査隊による報告、「我々が出会った彼らはカサマ村より30分ばかり森に入った地で、狩猟キャンプを開く一家族と呼べそうな小さな集まりだった。彼らは乾期になると、カサマ村近くを流れる川の乾上りより塩を採取するため、毎年そこに来るといふ。」を頼りに、我々は計画を進め、今回の遠征に至ったわけである。

計画段階では、森の中を動物を求めて移動している狩猟民に出会い、かつ、一緒に彼らと同じ生活ができるのかどうかと危ぶまれていたが、とにかくバテンボキャンプに辿り着くことができた。そして、約3週間という短期間ではあったが、キャンプ内で一緒に生活することができ、調査活動を行うことができたのは好運であったと思う。

狩猟採集生活を営む社会は、ほとんどの場合文字を持っておらず、無文字社会と呼ばれている。我々の辿り着いたバテンボの社会も、同様に文字を持っておらず、それゆえに変化し、消えていく彼らの生活・文化がある。我々はそれらを、未熟ではあるが記録・記述することができ、また、彼らと共に笑い、お互いの存在を知り合えたことに満足し、遠征の目的を果たしたと考えている。

我々の滞在したバテンボキャンプは、カサマ村より2時間半ほど森の中に入ったところにあり、昨年のキャンプとは違い、もっと大きな集まりで、チーフ(族長)の存在もあった。既に、文明の波がキャンプへ、農耕民と共に押寄せつつあった。肉を求めて農耕民が常に出入りしており、物々交換が主ではあるが、お金による交換がなされていたことに、少なからずショックを受けた。しかし、我々の様に滞在し、記録をとるような人は、今までにいなかったらしい。

我々の滞在が予定より短かった理由は後述することとして、キャンプ内

での生活について記しておく。電気も水道も、トイレも無い彼らの生活は、我々から見れば、貧しい、不便な、衛生的でない生活かもしれない。しかしながら、現代文明が見失いつつある、人間本来の姿がここには残されているような気がする。時間に束縛されることもなく、素直に喜怒哀楽があらわせ、周りの人のことを常に考えてやる思いやりがあり、報酬を期待しない行為がここにはあった。

我々はこの遠征を通して、国籍を問わず、実に多くの人々と知り合い、ともに笑うことができた。その意味で、今回の遠征は我々の今後の糧になるものと信じる。

また、この報告書が少しでも、何等かの役に立つものになればと願う。そして、我々の後続くバテンボ調査隊があることを願って止まない。

去年の通訳兼ガイドの学生が、今回も手伝ってくれた。彼の同行が無ければ、バテンボキャンプにさえ辿り着けなかったのではないかと思う。

最後になりましたが、我々の遠征がここまで出来たのも、この計画を御理解、御支援して下さいました関係各位の皆様や、友人となった多くのアフリカの人々によるものと考え、心より感謝している次第です。(C..L.記)

<キャンプ内滞在日数に関して>

狩猟民のキャンプに滞在することの難しさを知らされた。当初の予定では、1ヶ月、約4週間であったが、我々が入って数日後から、彼らの食糧でもある動物がとれなくなり だした。キャンプの中の何人かが、その原因を我々の長期滞在にあると考え出したのである。彼にしてみれば、生死に拘わる重大な問題であり、白人としては初めて長期滞在をしている我々の存在に原因を求めたのであろう。我々の日々の行動、写真を撮ったり、家財道具をスケッチし、彼らの生活を知りたがっている姿は、彼らの目には理解しきれない奇怪なものに映ったに違いない。チーフをはじめ、何人かの人々は、我々の滞在を庇ってくれていたが、動物が今までのようにとれない日が続き、庇いきれなくなったと思われる。そこで、我々は予定を1週間早め、バテンボキャンプを後にしたわけである。何故、動物がとれなくなったのであろうか。